

A large, bold calligraphic character '沖' (Oki) is written in black ink. The background features stylized waves in shades of blue and purple, set against a light orange and pink gradient sky.

俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

暮古月

能村 研三

和食

一瞬の風の息継ぎ朴落葉

どぶろくを酌んで燻り話かな

平等な時間を使ふ十二月

冬耕の鋤へ遠目を効かせをり

「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録された。和食は、特に日本でなじみ深い新鮮な山海の幸を用い、日本の四季折々の風土の中で独自の食文化を築き上げてきた。生で食べることや素材の味を重視して薄口の味付け、そして繊細な盛り付け、年中行事とも密接な関係がある。日本料理においては、何よりも季節感が重視され、歳時記にも四季折々の食材が収載されている。

さらには、食べごろを捉えて、季節を味わう文化もすばらしいもので「旬の味覚」を楽しむことは、うつらう四季とともに暮らす日本人の知恵として、長い間育まれてきた。出始めの頃の「走り」、初物とも呼ばれ、新しい季節の到来を喜び「走り」を楽しむのは粹なこととされてきた。「盛り」とは最盛期で、味も良くもっともおいしい時期、つまり旬の盛りに食べることが、味はもちろん多くの人が食べることが出来る時でもある。

そして、終りの頃は「名残」として、去りゆく季節をいとおしむよう

浅眠むの鋭峰のなき安房の山

神楽坂 二句

小春日の見番脇の火伏神

神の留守酒房伊勢藤の潜り木戸

切る煮るの和食嘉して暮古月

注連飾る磨き細めし棧格子

蕎麦搔を父流に食む書肆帰り

に味わうのは、また格別の趣がある。このような、季節のものを、美味しく食べる文化は日本人の繊細な感性から来るものである。

正月の行事でも餅つきをしたり、雑煮の用意をしたりするのは、正月を迎える上で欠かせないことである。新しい年になり、家々の伝統に従って美しく盛りつけられたおせち料理を食べることは、家族の絆を強めることにも役立つている。

おせち料理はめでたいことを重ねるといふ願いを込めて重箱に詰めるそうだが、たとえば黒豆は一年中「まめ」に働き、「まめ」に暮らせるようにとの願いが込められていたり、数の子はたくさん卵があるということから、子孫繁栄の願いが込められているなどを親から教えてもらったことを思い出した。

加賀ぶりも年々薄れ雑煮膳

登四郎

能村 研三

蒼茫集



盆地霧

吉田政江

杉山の威風をpushさへ山紅葉
湖の落し蓋めく盆地霧
赤牛の長鳴き霧の底を這ふ
霧底に始発の汽笛阿蘇盆地
大吊橋谷底紅葉揺れてをり
小春日の由布正面に木椅子かな

人の世

千田

敬

初もみぢ壯樹のなかに恥ぢらひて
もみぢ酔ひか吊り橋酔ひか溪深し
冷やひやとふぐりにひびく「夢の吊橋」
風邪の神山の神より御しやすく
七彩の人の世唄ひ時雨に逝く
わが影の冬帽われの先を往く

欠

伸

安居正浩

小春日の欠伸さざ波のやううつる
終の地と決めたる町の秋祭
襖絵に虎の咆哮萩の寺
芒原はづれの芒よく揺るる
神の留守人は飲食繰り返す
木守柿より夕暮の広がりぬ

有難し

辻美奈子

障子貼るひかり転がすやうに貼る
くづ糸の色いろいろの神の旅
暮れのこる白を残菊とぞ思ふ
新米も赤子も重し有難し
出でてきしところと違ふ穴惑
霜の夜の機体深海鮫の如し

旅に出む 千田百里

現世の音や月夜の洗濯機
霧迷ふ由布の二峰は神の技
世紀東島文部四十年 二句またぎし四十年を祝ぎ萩は実に
初しぐれ生命の森の靄囲ひ
冬あたたか翔先生の忌なりけり
登四郎の枯野を探す旅に出む

生きてゐる証 宮内とし子

生きてゐる証を見せず海鼠かな
落し蓋とればほつこり冬に入る
切株の椅子やあやしき茸出て
初鴨やしぐれの黙の沼豊か
くるくると遊ぶ小春の匏屑
冬ざるる並木はづれの理髪店

己が影 渡部節郎

己が影長く引き摺り秋遍路
霊場に写経の庵露匂ふ
宿坊の膳を彩る菊臙
巡礼の四・五寺を残し初時雨
安達太良に智恵子の空や大根干す
括る・干す・晒す・吊すや冬初め

左手 林昭太郎

木守柿一つといふはよく光り
台風裡予約のテレビ不意に点く
善い人の俳句たいくつ草の花
家奥陸奥三句にほふ煎薬一葉忌
左手はいつでも受け身林檎むく
みな同じ官舎の間取り花八つ手

洩 大畑善昭

妻もまた匆忙にあり吊し柿
洩や駄文を一つ脱稿し
産卵の鮭涙目と思ひけり
湯婆や仙境ふかく入る眠り
枯山のしづかや木々は光り合ひ
冬日和年輪に読む飢餓戦争

若鴨 遠藤真砂明

サーファーの立つや伊八の冬波に
かまふもんかとお漁の横しぐれ
一天四海荒れて日蓮忌なりけり
冬へ迫り出す走り根の崖つぷち
若鴨の雨の初陣構へかな
武蔵野の精気五体に受けて冬

ふるさとのこと

田所節子

天高しふるさとのごと師の碑訪ひ
声なき声放つ爽氣の仁王像
薄紅葉して由布の二峰のやさしかり
鬼やんま鋼びかりの翅拡げ
文化の日文化は地球汚しもし
われを待つともしびのあり雁渡し

冬あかつき

吉田陽代

現へと冬あかつきを寝返りぬ
地元の小径知らずにをりし冬椿
落葉して櫛は空をふところ
石路の花分相応の日射し得て
台風一過詫びるがごとく夕照りぬ
己が声たよりに石焼芋屋すぐ

枯野より

大橋俊彦

歳晩の踏切に人向き合へり
裸木は言葉を持たぬ赤ん坊
大嚏きつと誰かが聞き耳を
枯野より来てぴかぴかの蛇口かな
潔癖はどこか窮屈冬の水

真上踏む

菅谷たけし

陽を巻いて転がり上手芋の露
枯蓮のへの字くの字は影曳かず
公園にD3出口からす瓜
野鳥舎へどの道行くも木の実踏み
そぞろ寒カタカナ書きの来鳥誌
冬眠の蛇の真上を踏む不安

巨大モール

成宮紀代子

巨大モールのマイカー探す日短し
いつ服の軍手仮置く束の萩
冬瓜にたぢろぐ二人暮しかな
秋の夜やさても寝つきのよき夫よ
根菜のポトフのとろみ雪催
ハイヒールやつと断捨離して師走
ふるさと

望月晴美

枯蠟螂生涯いく度身構へし
住み馴れしここがふるさと梨を剥く
新米にどこか草の香ありにけり
木の実落つ前ぶれの風こまやかに
鳩のきてにはかに湖面かがやかす
枯るものの光をあつめ枯野句碑

明け暮れ 荒井千佐代

空の魚籠さげて抜けたる花野かな
秋彼岸四隅の乾く四手網
ちちはは亡し姉亡し鴟の啼いてをり
秋の雨ボレロ半音づつ上がり
狂ふほど人を恋ふ日々雁来紅
明け暮れに海見て恙無き晩秋

野紺菊 楠原幹子

九州の山脈やさし秋日和
野紺菊わが青春の由布岳鶴見
夕風の冷えきて山の近くなる
みんな句敵ふぐちりを囲みゐて
耶馬溪や切り立つ岩を紅葉抱き
四十年の来し方しかと式部の実

廁より 岡部玄治

廁より日ざしの退る冬はじめ
あらためて山立ちあがる初冠雪
鳥翔ちてにはかに翳る狩の山
枯葉また踏みゆく寂に耐へきれず
禽のこゑ遠にするどし枯れの中
もどりたる獵夫しばらく黙解かず

繭明り 甲州千草

神の留守いつも鞆に傘のあり
放牛の黒点峽の残り稲架
団栗は袋を溢れ反抗期
立冬や麩菓子の子の繭明り
吊橋に透くる滝音すでに冬
木登りの像の踏ん張り冬来る

花 鈴木良戈

花柘祝辞の終の褒め言葉
底冷えの石膏像の展示室
鳥威し学校田の干涸びて
落鮎の光りつ宙へ跳ねにけり
ちやんこ鍋囲む力士の愛でたさよ
何時までも無口老いたる牡蠣割女

外 濠 上谷昌憲

外濠の端の釣堀冬ざるる
月光の転がつてゐる崩れ築
孫の手の背中を滑る夜寒かな
しぐるるや嘗て男に麻雀屋
神留守の水ふんだんに魚市場
爪に星点して少女毛糸編む

潮鳴集

能登五句

能美昌二郎

水打つて茶屋町夜へ動きだす
秋晴や能登に先師の句碑詣
能登瓦新築に見え冬近し
鰯雲鱗の果てに能登の海
能登の国海に突き出し冬隣

葉 味 清水佑実子

かぼすぎゆつと今日のひと日を締めくくる
詩囊ふくらむ九重やまなみ薄紅葉
錦秋の野山を統ぶる由布二峰
来し方の禍福は葉味河豚を食ふ
大吊橋の天空の秋賜りぬ

不在の椅子

荒井千瑛子

野分あとページめぐりし如き空
黄落やいつか不在となれる椅子
里祭野狐台てふ町に果て
青空へ影やる遊び冬の鵒
直火なき暮しに慣れて一葉忌

喜 楽 菊川俊朗

水口の喜んでゐる落し水
城跡は風吹く処草の花
紅葉かつ散る山々は位に即きて
神将に喜楽のなくて冬に入る
山眠る前に吐息のごときもの



『曙光』

(自選二十句)

吉田政江

初明り波に序列の生まれけり
春一番一拍はやき唄ひ出し
立春大吉すいと懸垂上りけり
まづ阿難たしかめてより涅槃絵図
さはらせてもらふ胎動うらけし
同じもの食べて笑つて花疲れ
握るほどすり抜ける砂春愁
三月十一日日本地図歪む
万緑のくり貫かれたる湖明り



糶あとの鱗だまりへ水を打つ
茅花流しかな銀輪の縦一列
今日の知恵けふ使ひきり凌霄花
にぎり酒三半規管あるを知る
忘れたきことに火が付き泥鰌鍋
夏祓号鼓の革の打たれ艶
秋風鈴絶対音感呼び覚ます
曼珠沙華薬効といふ毒信じ
ほどほどにあなどられゐて鳥威
銀翼の音なき高さ大花野
曙光に浮き立つ麦の一粒芽

『鏡の中の庭』

(自選二十句)

千田 敬

愛のことば人斬ることば魚は氷に
モナリザの眼差し追へば春立ちぬ
「もういいかい」大樹のさくら散りに散る
霾や漢字に馴染み二千年
五月来る象のまなこの皺ぐるみ
梅雨めきて身の蝶番きしみ出す
二人居の黙も会話よ貝風鈴
平らなる水の性捨て男滝かな
終戦日鏡の中の庭にをり



あをぞらへりんごの皮の螺旋階
秋の雷去りてふたりの咀嚼音
秋水に漱ぎしあとの耳聡し
白こそは日本のいろ障子貼る
欠伸さへなにか露けくなりにつり
わが身とて未は粉々天の川
風聞おそろしななかまどが火元
皮手套一円玉にあしらはれ
南座を筋交ひに来る寒四郎
凍滝のうちに秘めたる青の季
連れ添うてをり雪片は雪片と

『誤差』

(自選二十句)

今瀬一博

この小さき命重たし天花粉
栗を剥く包丁として古りにけり
薄氷の刃先は水となつてをり
先生は怒るがよかり桜東風
噴水の力の束を解きにけり
合はす手の小さくずれて七五三
起立してなんと不揃ひ卒業子
黄砂降る一千キロも誤差のうち
むらさきは争はぬ色初筑波



句点なき証書一枚卒業す
もういいと言ふ口癖や生身魂
秋瀑の山ぬぎすてし光かな
切手貼る一滴の水麦の秋
ひよつとこの隠れたばこや夏祭
漆搔き男も鎌も古りにけり
餅搗きて新しき月上がりけり
吐く息の短く濃かり合格子
尾に力あり復興の鯉幟
日本に禪のあり夏祭
合格を決めて怒濤に会ひにゆく

『岬日和』

(自選二十句)

佐久間由子

藍甕に藍ふつつふつと十三夜
夕立来る父に背きし日のごとく
能登はいま万緑海へなだれけり
サーファーに太平洋といふ舞台
岬晴を讃へ始まる松手入
涅槃仏安房の男波を台座とし
しろがねの風を手折りぬ芒原
天渺々鏡あはせの湖は秋
蛸籠帰らぬ人の部屋へ吊る



かなかなの木がとけて行く夕間暮れ
一葉落つ一人に慣れし身ほとりに
あをあをと北斗逆立つ追儼かな
天心に師のまなざしや朴の花
よろづ屋に冬瓜ころげ岬日和
梅干して庭の隅々まで母郷
円かなる海月や秘するものはなし
碇泊船はるかに卓のメロン切る
隼の翔くる高嶺や火入れ窯
凍滝の音なき音を聴きぬたり
菰ぬちに秘めたる力寒牡丹

年間十二句

五十嵐章子

山霧の晴れて険しき斜面かな
少年へ戻る藪こぎ烏瓜
棉吹くやシスター多き旧市街
後ろよりブーツかつかと冬来る
タイマーに瞬の静寂初写真
夕東風や台地の端をゆく家路
名は知らず辛夷の家とおぼえけり
テレビのみはしやぐ暮春の待合室
葉桜や会ふより別れ多くなり
リラの花また間に合はぬ帰郷かな
バスの来て緑蔭の人みな動く
いなびかり握る手つよく返さるる



年間十二句

関根瑤華

けものらの息をひそめて初時雨
木の実独楽じんじん回り淋しいぞ
蟠り解けず海鼠を噛んでゐる
はらわたのありさうもない桜貝
後ろにも正面のあり花万朶
花ミモザドレッシングはよく振つて
鱈干さる青き涙の乾くまで
桜桃忌水底にある捨鏡
路地裏の余白大事に釣忍
罐詰のぱかつと開いて不死男の忌
鴟高音ななめに裂けるセロテープ
パントマイムふいに掴むや秋の風



年間十二句

峰崎成規

水準器気泡天見る小春風
蒼天へ大網打ちし枯れ櫂
日を撥ねる破魔矢の鈴の金と銀
日が燥ぐアルミ車輻の雪あした
春疾風握る拳に修羅ひとつ
若葉にも日面日裏すでにあり
囀りやときめき何時も未然形
矢車やからから風の夜を紡ぐ
眠りへと短夜区切るアンソロジー
草いきれ野心の芯にある青さ
星流る無限の果へ逝く無限
ボールペンしばしノックの秋思かな



沖作品



能村研三選

鯉に影戻りて水の澄みにけり

本籍は鹿鳴く頃よ父御座す

空想を広げて発熱の夜長

父ひとり紫紺の魂の秋茄子

思ひ出に触るれば痛く枳殻の実

花野来て花に紛るる安堵かな

望の月ときに同胞なつかしく

帆船のマストに秋思絡みつく

吊橋の真ん中あたり秋思かな

日蓮の辻説法跡秋澄めり

傘鉦に潜む鈴の音秋の風

秋天を揺らし長坂「もってこい」

宮日馬鹿髪の先まで逆立てて

一叢の滅びの紅の鶏頭花

秋燕我が青春の遅刻坂

千葉

馬場由紀子

神奈川

神山 節子

長崎

福山 和枝

憂きことをひとまづ畳む秋扇

父の影踏んで畦ゆく後の月

芋の葉に水の張力ゆるぎなし

廃屋に使はぬ闇や蔦紅葉

辛口の批評さかなに古酒の酔

秋落暉畑終へ詩人となる一瞬

「シエーンカムバック」耳内に残響秋夕焼

萩月夜みちのくいまだ仮設の灯

鯛街道ありし上総の峠茶屋

鱈酒に火照り腹蔵なにもなし

野分をも甘受して建ち先師句碑

カボス絞る豊後の魚舌を撥ぬ

海鏡 冬夕焼の乱 反射

百菊や江戸職人の技極む

烏瓜ほそき嘆きを糧と満つ

神奈川

大矢 恒彦

千葉

小河原清江

東京

平松うさぎ

沖作品 15句選評

*
能村研 評

年が変わって初めての「沖作品」。十四名の方が同人に推薦され、また新たな気持で「沖作品」の作品を競い合うこととなる。選者としても、気持を新たに、本年の新人の進出に期待したい。

空想を広げて 発熱の夜長 馬場由紀子
発熱という人の体に起こる現象。かなりの高熱の場合には別にして、熱が出始めたときの体が浮くような感覚になることがある。こういう時は、気持がハイテンションになり、普段より空想力、想像力といったものが広がる。余り健康的な状況ではないが、すぐに寝付くこともできず、しばらくは空想の世界の中を浮遊することにした。

花野来て花に紛るる安堵かな 神山 節子
花野は夏のお花畑のような華やかさはないが、空の青と清ら

かな空気と風によって、花も白や紫など落ち着いた雰囲気のものが多くなる。山麓の花野の霧が少しずつほぐれて現れた花々の清々しさ、幽玄さはまさに幻想的でもある。「花野浄土」という言葉があるが、花の中に紛れた安堵のひとつ時は至福の間でもある。

一叢の滅びの紅の鶏頭花 福山 和枝

伊藤左千夫に「鶏頭の紅古りて来し秋の末や我れ四十九の年行かんとす」という歌があるが、この句も、うらがれた晩秋の庭の草々の様子が描かれている。秋の風に吹かれて乱れ立っている鶏頭。露に打たれて明るい赤色から黒ずんでくるが、これを作者は滅びの紅と表現した。

廢屋に使はぬ闇や 蔦紅葉 大矢 恒彦

人が住まなくなつてしばらくの時間が経った。しかし家は壊されることなく、そのまま外観は次第に朽ちてきた。いつのまにか外壁全体に蔦紅葉が絡まっている。この家を見るたびに、家の中はどのような感じだろうか。想像力が増した。闇も人間が暮らさなくなった時から同じ闇が居続けている。

「シエーン・カムバック」耳内に残響秋夕焼 小河原清江

映画のラストシーンでだれでもが知っている感動の不滅の名作といってもよいだろう。夕焼けの中を静かに去っていく男の背に、「シエーン、カムバック」とあの少年の声が切なく響く。耳内に残響するようにいつまでもこだまする。

(以下略)